

古代国家のあゆみ

■古墳がつくられた時代

古墳とは、土あるいは石を積んだ墳丘をもち、その内部に遺体をおさめる施設をつくって、鏡などの副葬品をおさめている墓のこと。死者に対する手厚い埋葬の方法である。ここに埋葬された人物は地域を支配した実力者と考えられ、古墳はその人物のための個人墓であり、権力の象徴であつたといえる。したがつて古墳の出現は、政治的権力者の登場、政治的社会への変質を意味している。この時代を前の

弥生時代と区別して、古墳がつくられた時代、古墳時代とよんでいる。



埼玉古墳群の丸墓山古墳より稻荷山古墳をのぞむ（埼玉県行田市） 北武藏を代表する古墳群である。この地域では、5世紀後半から7世紀初頭にかけて南関東とは対照的に大規模な古墳がつくられた。



野毛大塚古墳（世田谷区） 5世紀初頭につくられた全長約84mの帆立貝式古墳。6世紀以降になると南武藏ではこのような大型の古墳がつくられなくなりその規模を縮小していく。

日本の古墳は三世紀から七世紀にかけてつくられ、南は九州南部から北は東北中部までに分布し、形も円墳、方墳、前方後円墳をはじめ八角形古墳など、変化に富んでいる。古墳時代は通常古墳の規模や副葬品などから、前期、中期、後期に三分割されているが、前期の前に発生期、後期のあとに終末期の古墳という名称を用

いてよぶこともある。

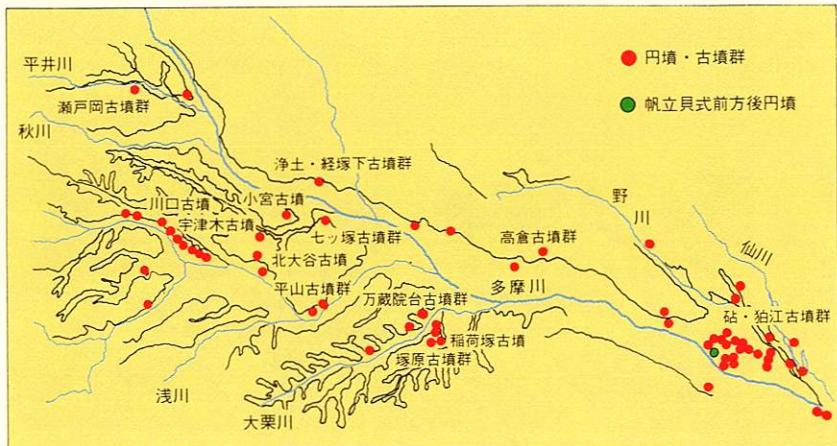


武藏国造の乱の勢力分布図(東京都教育委員会『発掘物語』参考) 関東地方の古墳群の関係を、『日本書紀』の記述と結びつけた解釈があるが、いまだはっきりとはしていない。

古墳時代前期は四世紀を中心とする時代で、古墳の副葬品には鏡、玉、剣といった呪術的要素の強いものが多くみられ、葬られた人物が司祭的性格をもつていたことを示している。中期は五世紀を中心としており、墳丘の大規模化、分布の拡大がみられる。副葬品も馬具や武具などの軍事的性格をもつものが多い。後期は六、七世紀にあたり、多数の小規模な古墳が集中する群集墳を特色としている。群集墳の出現は、古墳の築造が支配者層だけでなく、有力農民の家父長層といった地域集団の富裕階層にまで広まつたことを示している。

■古代武藏国の権力闘争

武藏国の古墳は、柏江古墳群など多摩川下流域を中心とする南武藏古墳群と、荒川流域の埼玉県行田市の埼玉古墳群に代表される北武藏の二地域を核として分布している。この南と北の武藏国の古墳群の存在と大和政権との関係が、武藏国造の乱の解釈をふまえて考えられている。『日本書紀』によると、五三四年(安閑天皇元)、武藏国造笠原直使主と同族の小杵(おおき)とが、國造の地位をめぐって対立した。小杵は大和政権に従う姿勢ではなく、上毛野(かみつけのかみおごま)の豪族上毛野君小熊と結び、使主を討とうとした。これに対し、使主は大和政権に訴え出て助けを求めた。この対立が、東国の有力豪族上毛野君と大和政権との戦乱に発展したのである。



多摩川流域の古墳分布図(世田谷区郷土資料館図録参考) 多摩地域では6世紀に現在の日野市や府中市を中心に群集墳がつくられるが、その多くは7世紀に入ると姿を消していく。しかしあきる野市瀬戸岡古墳群のようにその後つくられた古墳群も存在する。

反乱の結果、小杵は滅ぼされ、使主が国造の地位につき、代償として、横淳（よこぬ、埼玉県東松山市周辺）、橘花（たちばな、神奈川県川崎市付近）、倉櫻（くらす、横浜市付近）、多氷（おほい）の四か所を屯倉（朝廷の直轄領）として大和政権に提供した。このうち、「多氷」は「多末」の誤りかともいわれており、現在の多摩地方と推定されている。この反乱は、6世紀の地方の有力豪族の在地支配と、大和政権の関係を示すものである。

献上された四か所の屯倉は小杵の支配地であった南武藏であり、したがつて使主の支配地は北武藏であつたと考えられている。6世紀以降、南武藏には大型古墳がみられないが、北武藏では埼玉古墳群を中心に受け継がれていった。このことは、南武藏の勢力が北武藏の勢力に組み込まれたためと考えられよう。

■多摩の古墳と当時の生活

多摩川流域の古墳は、下流域に四、五世紀の大型前方後円墳がみられるが、上、中流域にはそれより時期的に新しい小古墳が分布する。福生市を含む多摩川左岸では、昭島市域より上流には古墳がみられず、古墳を築造できるような勢力が存在しなかつたようである。多摩川上流域ではなく、下流域の東京湾に近い一帯に大型前方後円墳が出現したことは、弥生時代以来発展した農業生産を背景



宮ヶ谷戸遺跡 4号住出土土器(あきる野市教育委員会蔵) 古墳時代の住居跡宮ヶ谷戸遺跡4号住居からは、このように多くの土器が出土している。食料の煮炊きや貯蔵用の甕(かめ)や瓶(こしき)、盛りつけに使われた皿である坏(つき)などがある。

宮ヶ谷戸遺跡 4号住居(あきる野市教育委員会蔵) この住居跡は古墳時代後半のものである。この地域は古墳時代の集落で、隣接する雨間地区遺跡からも大型の住居跡を含め14軒が確認されている。

このように生活のなかに取り入れられていくたことがわかる。またこの時代、食生活はかまどの導入によつて大きく進歩し、甑(こしき)を使つて蒸して調理する方法も行われるようになつた。米のほかに麦、稗(ひえ)、大豆などの雑穀や豆類のほか、野菜も食前にのぼるようになつた。ときに応じて、縄文時代以来の採集や漁撈も食生活に潤いを与えていた。



に、大和政権の力が海路から及んできたことを物語つていると考えられる。この一帯の古墳は、多摩川下流域を支配した盟主的首長の墳墓であろう。ところが五世紀以降、多摩川下流域では、大型の前方後円墳が築造されることではなく、南武藏の古墳群は規模を縮小していった。それに対し、北武藏では大規模な前方後円墳が築造されており、対照的な方を示している。

このような古墳時代の人びとの生活の様子は、遺跡や出土品から知ることができる。昭島市の山ノ神遺跡(福生市と昭島市との境界)や、八王子市域の古墳時代の遺跡からは、鉄製の鎌、鋤(ほほき)、斧なども発見されており、鉄製品が